

こころの玉手箱

「戦う主教」の人形



オハイオ・ウェスレヤン大学のマスコット

学に入るというこ
とは親元を離れる
ということとほぼ
同義である。たと
え実家が近くにあ
っても、親から独
立して寮に入る。
同年代の新しい友
人と生活空間を共
に創る経験が、彼
らを成長させるか
らだ。日本の若者
が大人になるチャ

10年ほど前、アメリカ中西部に点在するリベラルアーツ大学を見て回った。そのうちの1つオハイオ・ウェスレヤン大学¹でいた。いたお土産が、公式マスコット「戦う主教」の人形である。19世紀半ばに創立されたこの大学は、メソジスト教会を教派的な背景としており、教会の主教になる卒業生も多かったため、今から100年前の1925年にこれがマスコットに制定されたということである。

アメリカの大学では、大

学問対抗のスポーツ試合などでよくマスコットが登場する。私立でも公立でも使われ、たとえばプリンストン大学ならタイガー、ワシントン州立大学ならクローガーと、たいていは強そうなる動物がマスコットになる。この「戦う主教」も顔をしかめてこちらを睨んでいるが、それでどのくらい強そうに見えるかはちょっと心許ない。

視察の目的は大学の学生寮を見学することだった。アメリカの学生にとり、大

大学のあり方に思いはせ

ンスはいっただろう。

ことにリベラルアーツの大学はまとまった校地を求めて郊外や田舎に創設されるので、全寮制であることが多い。日本では通学に便利な都会の中心部にある大学が人気だが、「キャンパス」という言葉はもともと「野原」「野营地」のことである。最初にこの言葉が使われたプリンストンも、かつては都会の喧噪から離れた田舎の大学町だった。

大学が田舎にあると、教員も田舎に住む。近年はアメリカの大学でも非常勤の教員が増えて問題になっているが、田舎の大学では通勤が難しいのでそれほど多くならない。学生のアルバイト先も限られるため、自然と勉強に集中することができる。日本の大学が抱える問題は山積みだが、せめてその4年間だけは勉強に集中できる環境を整えてやりたいと思っっている。

来週は作家の安部龍太郎さんです。